



関大から世界へ——

目標は、バンクーバー 冬季五輪で金メダル

高橋 大輔 ◆文学部総合人文学科身体運動文化専修3年次生

織田 信成 ◆文学部総合人文学科英語英文学専修2年次生

◆司会 奥 和義——学生センター所長(商学部教授)

◆氷の上では互いに良きライバル

——最近、どこへ出張しても「男子フィギュアスケートで有名な関大ですね」と言われ、鼻が高いです。高橋君、織田君に続けとばかりに、キャンパスにも学生たちの熱気があふれています。全国各地の校友会からも、高橋君、織田君を応援したいという声が上がリ、OB・OGの結束も高まっています。今日は注目の二人に、じっくりお話を聴きます。まず、フィギュアスケートを始めたきっかけから。

高橋 幼いころ、両親は僕に何かスポーツをやらせようという勧めました。でも僕が嫌がって、実際に試すところまでいかなかったのです。たまたま8歳の時、家の近くにスケートリンクができた。やってみると、はまってしまったんです。初めは全然滑れなかったのですが、「あっ、僕はこれがやりたかったんだ」と思いました。

織田 僕は母がフィギュアスケートのコーチなので、気がついたら氷の上で感じてます。3歳ごろから母のそばをちょろちょろして滑っていたらしく、5歳ごろにはジャンプを教えてもらいました。

——それぞれ、スケートとの運命の出合いがあったわけですね。これまでで一番印象に残っている試合は？

高橋 昨年のトリノオリンピックです。あんなに悔しい思いをした試合はないですから。自分が、本番で力を出せなかったこともありますし、もう少し頑張っていたら…という自分に対する腹立たしさも。今振り返ると、やはり経験も自信もなかった。オリンピックの雰囲気にもまれていました。

——トリノでは8位でしたが、その後、好成績が続いています。オリンピックの経験が糧になっているのでしょうか。

高橋 自分が変わったとは思わないんですが、結果が出ているということは、オリンピック出場の経験はやはり大きいと思います。

——織田君は大泣きで有名になったけれど(笑)、心に刻んでいる試合は？

織田 高校3年生の時の世界ジュニア選手権大会です。その前年は11位だったんですが、優勝できて、自分でもいい演技ができたと思いました。つらい練習を頑張ってきたのが、やっと報われたかなと。

——世界のトップを独占する二人ですが、負けたくない火花は

散っていますか(笑)。

高橋 日本人として、負けたくない。織田君とは氷の上ではライバルですが、普段は何ともないです(笑)。

織田 ドラマみたいに、スケート靴を隠したりしないですよね、あはは。

——高橋君が3年、織田君が2年ですが、先輩・後輩という感覚はありますか。

高橋 全くないですね。

織田 大学に入る前から、高橋選手とはずっと一緒に試合をしてきましたから、大学に入ったからといって、急に敬語は使えない。周りからは「お前はどのようにして先輩に敬語を使わないのか」と注意されることもありますけれど。

◆トップアスリートの悩みは「ジャンクが食べられない」

——日々の練習で気をつけていることや、体調管理について教えてください。

高橋 まず、病気にならないこと、けがしないこと。練習する時は集中して、体を休めたり、ケアする時間も大切にしています。

織田 僕は小食なんですけど太りやすいので、食事には特に気をつけています。今、体重は55キロです。

高橋 僕は60キロで体脂肪率5%。だいたい体脂肪率は5~7%がいいようです。あまり落とすと持久力がなくなるみたいで。また、僕は食事制限が苦手なので、トレーニングでベスト体重を維持するようにしています。もちろん、お酒は控えていますよ。——食べたい、飲みたい盛りなのに、世界のトップアスリートは大変な苦勞をして節制しているんですね。海外の試合では何に注意していますか。

高橋 風邪を引かないことです。食事が変わりますから、野菜不足にならないようにしています。

織田 食事は、日本が一番ヘルシーだと思います。海外へ行くと誘惑が多くて困る…。アメリカのマクドナルドは、コーラがでかいでしょ。僕、コーラが大好きなので、マクドの前はなるべく、さっと通り過ぎるようにしています。実は一日の三食ともマクドだったこともあるくらいに好物なので。

高橋 ふだん食べられないからか、僕もジャンクフードが好きです。たまに食べると「ジャンク、食べたぞ」みたいな、感動に満たされます。

織田 でもマクドへ行っても、サラダを食べウーロン茶を飲むように、なるべくフライドポテトとコーラには手を出さないように、努力はしているつもりです。

関西大学は、「強い関西大学」「関大から世界へ」を合言葉に、アイススケート、アイスホッケー、サッカー、アメリカンフットボール、硬式野球、陸上競技(駅伝)の6つの競技を最重点強化種目として、スポーツ文化におけるフロントランナー育成に力を入れています。その成果は早くも表れ、この二人の活躍によって関大の名前を世界に知らしめることになりました。言うまでもなく、アイススケート部の高橋大輔さんと織田信成さんです。奥和義・学生センター所長が二人に聞きました。

世界へ羽ばたく
関西大学

スポーツ
関西大学

■対談

親やコーチにやらされているんじゃないやなくて、自分がやりたいというのが一番大事だと思う。



高橋大輔 (たかはし だいすけ)
1986年岡山県倉敷市生まれ。倉敷聖松高等学校卒業。文学部総合人文科学身体運動文化専修3年次生。2002年世界ジュニア選手権優勝。06年トリノオリンピック8位の後、NHK杯、全日本選手権、第23回ユニバーシアード冬季大会で優勝。

◆4分間を独り占めし、素になれる

—二人にとってフィギュアスケートの魅力は何ですか。
高橋 スポーツの中でも、これだけ一人が注目される、4分間を独り占めできる種目ってあまりないと思います。すごく気持ちいい。自分が最も輝ける、一番、素になれる、ありのままの自分を出せるのがフィギュアスケートです。
—確かに舞い始めると、高橋君の表情には神々しさすら感じます。これまでで、最もつらかったことは？
高橋 一番しんどかったのは、大学1年の時でした。環境が変わって遊びたくなくて、本当に、スケートをやめてしまおうかと思ったくらいです。高校生までスケート漬けだったので、大学に入って、爆発したって感じ。岡山から大阪に出て来て、街もでかいし、大学1年って、みんな楽しそうだし。やっぱり寂しかったですね。
—どうやって乗り越えたの？
高橋 1年の後半のころ、助けてくれた人があって。「そんなに遊びたいんだったら、遊んでみたら」とアドバイスされて、気が楽になったんです。「そうか、まあ、今年はいいか」と吹っ切れて、またスケートを楽しめるようになりました。

◆練習はつらいが、試合ではテンションが上がる

—織田君にとって、フィギュアスケートの魅力は？
織田 僕は滑っているだけで楽しい。ジャンプや回転、曲に合わせて踊ってみたり、フィギュアスケートにはいろんな要素がある。アクロバティックなところもあれば、自分の内面を表現するような深さもある。そこが魅力です。練習はつらいですが、試合でお客さんの前に出ると、テンションが上がってきて楽し

くなるんです。
—大泣きも、そこまで真剣に取り組んでいるからなんだね。二人のそれぞれの特徴、強みはどのあたりにあると思いますか。
高橋 僕の強みは、まだ分からないです。ほかの人の演技を見て、うまさに感心することのほうが多いですから。人の演技から勉強し、自分の位置を確かめ、試合でどう戦うかを考えています。
織田 僕は逆に、周りを全然見ないほう。練習の時も試合の時も、できるだけ自分に集中する。後で家に帰ってテレビを見て、あ、この人は、ここがいいとかチェックしています。
—織田君は高橋君を見て、どう思いますか。
織田 なんで、あそこまで自分の世界に入れるのかなって、感心しています。
高橋 実は、そうでもない。僕の場合、自分の世界に入り込んでいるように見せているわけ。わざとね(笑)。
—没頭していると見せて、冷静に演技ができる、そこがすごいですね。見ているほうは、時間が止まったように感じます。

◆アイスアリーナができて、練習に集中できる

—昨年7月オープンした関西大学アイスアリーナの感想を聞かせてください。
高橋 外でオフアイストレーニングをするにもいい環境ですし、アイスリンクも雰囲気良くて好きです。大き過ぎず、小さ過ぎず、練習しやすいですね。関大のアイスアリーナですから、気分的にもアットホームになります。
織田 宿舍も近いので合宿しながら滑れるし、周囲は自然がいっぱいで、練習環境としては最高です。
高橋 前は4回転の練習をしようとする、周りに大勢集まってきたりして、気になりました。ここができてからは、昼間、1人とか2人で練習ができるので、すごく集中できます。ありがたいことです。ところで、自分の世界に没頭しているという話が出ましたが、織田君のほうが入り込んでいるという気がしています。天性のものがある。僕にはできないことをしますよ(笑)。
織田 あはは。そうかなあ。
高橋 織田君のこの曲は、僕には決して踊れないとか、思いますが。本当は、何でもできないといけないんだけど…。それと、10代の元気がある。どれだけ滑っても、なんで、そんなにできるのっていうぐらい、練習しまくります。僕なんか、まいてしまう。だから最初に、後のことを考えて体力の配分を計算して、練習するんだけど。織田君は、最初から最後までがんがをやっている。
織田 僕だって疲れますよ(笑)。疲れてきて、一番しんどい時ってありますよね、そのしんどい時に負けるのが悔しくて、押し切ってやる。しんどさから逃げる自分が嫌なんです。本能的にここで負けたら、自分に負けてしまう、みたいなのがあったら、ここを乗り切ったら、人間的に強くなれるんだと言い聞かせ、押し切って、やっています。

◆4分間のために頑張って、いいものを見せる快感

—フィギュアスケートがうまくなる秘訣はありますか。
高橋 やっぱ、一番はスケートを好きになること。親やコーチにやらされているんじゃないやなくて、自分がやりたいというのが一番大事だと思う。続けられるかどうかは、好きか、嫌いかに尽きるでしょう。
織田 楽しむことが大切だと思う。練習もすぐつらいんですが、たった4分間のために頑張って、いいものを見せる快感。それがモチベーションを上げる。終わった時の体の軽さは、それこそ何と表現したらいいのかわからないくらいです。
高橋 そうそう、体中がくらくらとする。舞い終わった瞬間、もういっぺん、今の演技ができますよ、お見せしましょうかって。本当はへとへとで絶対に無理なのに。
—関大生になって良かったことは？
高橋 皆さんが本当に良くしてくださり、感謝しています。スケートに集中させてくれて、リンクまでつくっていただいて。すべてにおいて良かったと思います。
織田 試合で試験が受けられないような時も、成績に支障がないように、レポートにしてくださったり、文学部のみんながサポートしてくれます。関大で本当に良かったです。
—ここまで素直で素晴らしい学生さんですから、こちらも力が入ります。さて、友達はできましたか。
高橋 1年の時は、友達ができなかったんですが、2年になってたくさんできました。体育会系の人が多いですね。
織田 同じ学部の人たちが、僕がいない時の授業のノートを貸してくれたり、プリントをもらってくれていたり。そういう友達がありました。

◆人生を懸け、すべてを注いで五輪に臨む

—将来の目標、これから、目指すことについて。
高橋 僕の中では、今、バンクーバーで金メダルを取ることしか考えていません。その先については、冬季五輪の後で考えます。
織田 僕は、割とロングスパンで考えています。おじいちゃんになるころまで。バンクーバーに行って、そこで引退するかどうかは結果次第ですが、後はスケートのコーチか英語の先生になりたいと思っているので、勉強したい。高校時代の担任が英語の先生で、すごく良くしてもらったので、自分も生徒を支えられる先生になりたいんです。
—バンクーバー冬季五輪は2010年2月開催で、あと3年を切りました。オリンピックへの意気込みを聞かせてください。
高橋 トリノオリンピックは、僕が初めて目標を持った試合でした。負けて、自分の意識を変えてくれた試合でもあります。次のバンクーバーは、僕の人生を懸ける試合だと思っています。これまで、大学、コーチ、両親など、たくさんの人に助けてもらってスケートを続けることができました。そのお礼の気持ちを込めて、金メダルを取って帰ります！
織田 僕にとっても、バンクーバーは目標です。出場を果たせ



織田信成 (おだ のぶなり)
1987年大阪府高槻市生まれ。大阪府立阿武野高等学校卒業。文学部総合人文科学英語文学専修2年次生。2005年世界ジュニア選手権優勝。05年NHK杯優勝。06年四大陸選手権、スケートアメリカで優勝。

しんどい時に負けるのが悔しくて、押し切ってやる。しんどさから逃げる自分が嫌なんです。

ば初めてのオリンピックになり、絶対緊張すると思うんです。でも、そこでも楽しめるように、これからの僕のすべてを注いで臨みたい。
—世界を舞台に活躍し、メディアにもこんなに騒がれているのに、少しもおごることなく自分を失わずに頑張っている君たちを誇りに思います。大学としても全力でサポートするので、「関大から世界へ」羽ばたいてほしい。今日は、本当にありがとう。



アイスアリーナを市民に開放 スケート振興に貢献

大阪府高槻市にある関西大学アイスアリーナは、地域貢献の一環として市民にも開放されています。1月24日から毎週水曜日の午前中、市内の小学校の校外学習に利用されており、高橋選手や織田選手と同じリンクで滑れると好評です。2月18日には、市内の小学5、6年生計100人を対象にした「高槻市民デー(アイススケート教室)」を、高槻市と共催。アイススケート部の平井絵己さん、三木遥さんも参加し、模範演技を披露しました。また、今春から毎週末、一般のスケート愛好家向けに講習会も開講する予定です。
アイスアリーナは、延べ床面積が3,598.50㎡、スケートリンクは縦60m×横30m。アイスホッケーの国際競技規格を満たし、フィギュアスケートやスピードスケート・ショートトラックの公式試合も可能。観客席は518席。